EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.30
2006
（平成 18 年）
3－4

江戸東京博物館友の会会報

目次

初代役員が語る『友の会発足のころ』…… 1
創立５周年記念　館長特別講演会のご案内…… 1
友の会セミナー『よみがえる巣鴨の町並み』…… 3
友の会セミナー『シーボルトとモースの日本コレクション２』… 4
特別内覧会『山内一豊とその妻』展 …… 5
江戸博クリップ『友の会の電話に出ることもあります』… 5
見学会『小江戸川越 蔵造りの街探訪』/ 会議・会合日誌… 6
えど友プラザ　甲州道中「ある記」第３回 …… 7
ご意見・ご要望へのお答え／傷害保険のお知らせ … 8
えど友サークルだより …… 9
まんが『源内さんの江戸博さんぽ　その９』…… 9
江戸博界隈⑧ [隅田川橋めぐり(2)]と[ちゅらさん家] … 10
催事案内…… 11
会員優待のお知らせ …… 12

創立５周年を前に
初代役員が語る「友の会発足のころ」
―さらなる発展を願って

何ごともゼロからことを起こすのはたいへんなものですが、友の会の場合も初代の役員をはじめ関係されたみなさんのご苦労もさぞかし多かったことと思われます。

そのご努力・ご苦労に加え、それを引き継いで会の運営に携わった方々のご尽力や会員のみなさんのご協力で、現在では会員数も 1,000 名を越え、各種事業も順調に行われています。

間もなく５周年を迎えるに当り、初代の会長と事業部会長・広報部会長に、友の会発足当初を回顧していただき、当時の苦労話などをご紹介いただくことにしました。

これを将来への糧として友の会を一層発展させたいものです。

１年以上もかけた「会則」策定
初代会長　山本市郎

江戸東京博物館友の会の５周年にあたり感慨ひとしおであり、心からの祝福の言葉をのべたいと思います。

顧みますれば、７年前に準備委員会の呼びかけがあり、地域の関係者・ガイドボランティア・博物館職員等十数名の方々が集まったと思います。元来友の会構想は東京都側の発案でして、発足に当たっては、博物館活動への都民参加型の独立団体育成を、目的としていました。

いろいろな立場の考えを集めて、ゼ

江戸東京博物館友の会
創立５周年記念

館長特別講演会のご案内
－演題「江戸幕政の展開と紀州閥の形成」－

創立５周年を記念して、江戸東京博物館竹内誠館長による特別講演会を開催することになりましたので、ご案内いたします。今回は友の会をより広く知っていただくため一般公開といたしました。会員のみな様におかれましてはご家族、友人、知人の方々をお誘い合せの上、多数ご来場くださいますようお待ちいたしております。

※申込方法は本誌 12 ページをご参照ください。

★開催日時　平成 18 年３月 23 日(木)
13:30 開場　14:00 開会
★会場　江戸東京博物館・１階ホール
★講師　竹内　誠さん(江戸東京博物館館長)
★演題　「江戸幕政の展開と紀州閥の形成」
★申込締切　３月 14 日(火)必着
★参加費　会員、同伴者、一般とも無料

ロからの出発でしたから、その一助にと私どもが参加しました。

出発に当たって何の骨格もないので、まず「会則」の策定に一年以上の定期会合を重ね、他館・他施設の規則を研究して、江戸博にふさわしい条項にしました。公平で親しみやすく順守できる「会則」作りに努め、ようやく現行会則が誕生しました。館職員や起草委員の方々に貴重な時間をさいていただきましたことは深く感謝いたすところであります。

友の会は非営利親睦団体であり、運営には相互理解と仲良くが望ましいので、役員選出にもシコリを後に残さないよう心がけてきました。現状はうまく機能させていただいております。会員数も千名に発展させようと見通しを立てたのですが、5周年の今年その千名を達成し得たことは本当に喜ばしい限りです。会の活動も多岐にわたり、会員皆様の協力のたまものと深く感謝いたします。

世は挙げて民活の時代で、巨大博物館の将来もますます友の会の総力に頼らざるを得ない面が増加し続けることと思います。友の会の更なる発展を祈念いたします。

その都度話し合いながら

初代事業部会長　山口千恵子

友の会発足5周年、おめでとうございます。5年前の春浅き3月思いもよらぬお誘いに戸惑いを覚えました。江戸東京博物館という大きい組織の中で一介の主婦がお手伝いできるかと懸念し熟慮しました。主人にも相談、その一言「君はやはり江戸人、京生まれの僕にはわからないこと多いけど、君ならできる」と快く背中を押してくれました。

当初はパソコンに精通した方が多く、行事予定、意見交換など、パソコンに慣れていない私はことのほかたいへんでした。そのお陰で「平成の文盲」にならず、どうやら使うことができ、感謝しています。

発足時は20数名の部会員で4つのセクション（セミナー、見学会、古文書、創作）に分かれ、活動を開始、それぞれのところで問題が生じますと、その都度話し合いを持ち解決してきました。その中で博物館普及係に在職されていらした岩城紀子さんには事業部会としてお力を貸していただき、聡明さと決断力には敬服いたしました。心よりお礼申し上げます。

現在事業部会は今年度末までに、内覧会6回、見学会6回、友の会セミナー9回、古文書延べ27回と予定どおり進んでいます。また次年度に向け行事等を立案中です。会員数も千名を越え、皆様の友の会に対するニーズをどのように生かして満足していただくかが、これからの私たち事業部会の課題と思っています。

希望とやる気を支えに

初代広報部会長　大松騏一

いま会報『えど友』のバックナンバーをひもといてみると、当初はとにかく間に合わせることが優先だったなぁとしみじみ思います。また、少数メンバーでよく毎号発行しつづけられたものと、当時の広報部会員の方々を思い出しながら感慨と感謝を新たにしています。

友の会会報・創刊号

01年7月発行の創刊号はわずか6ページの構成。タイトルも『友の会会報』としゃれもなく、花もない。トップ記事は「発足総会の報告」で、組織図や予算案の数字など素っ気ない記事が連なっています。奥付に「会報は年4回・季刊」としたのも、展望あってのことではありませんでした。

しかし、次の第2号はたった2ページながら何と翌8月に発行しています。9月開催セミナーの告知を迫られたからで、「会員第一」の申し合わせ通りに皆でがんばった跡がうかがえます。そして第3号は10月の発行。役員の紹介を急いだためです。会員からの投稿を大事にしようと「えど友プラザ」の欄を設けたのも、この第3号からです。

こうして何もかも手探り状態で、大いなる希望の海へ漕ぎ出したわけですが、会員からの応募によって『えど友』の名に生まれ変わり、年6回・隔月刊が定着するまでわずか半年でたどりついています。あれこれ苦労を乗り越えられたのは、メンバーのやる気とチームワークのお陰。事業部会や総務部会、学芸員の皆様にも、いろいろお世話になりました。改めて御礼申し上げますとともに、今後のご健闘をお祈りいたします。

会員資格継続手続きのお願い

会員資格の有効期限は、入会の日から1年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

第35回 江戸東京博物館友の会セミナー（2005／12／15）

よみがえる巣鴨の町並み

―皇女和宮のおくりもの―

講師　高尾善希さん
（立正大学文学部史学科 非常勤講師）

なぜ今巣鴨か

江戸時代の公文書、旧幕府引継書の中に偶然巣鴨の史料を見つけたのが発端です。今巣鴨は行ってみたい商店街で日本一人気のところです。「おばあちゃんの原宿」とも言われ、とげぬき地蔵（高岩寺）へのお参りとそのお参りに来る老人を対象とした商店街でにぎわっている所でもあります。

私は江戸時代の都市と村落交流論を研究しており、運良くたまたま巣鴨の史料を見付けたので、江戸時代は場末として大変賑わっていた巣鴨に大いに興味を持っていました。

今日のセミナーは２つのテーマがあります。１つ目は今回の調査により巣鴨の景観復元をどうするか、２つ目は現在区画整理により巣鴨は時代の転換点にきており、商店街の取り組みと私の研究の２つがいかに絡み合うことができるのかです。

江戸時代の巣鴨

江戸時代の巣鴨は増上寺支配地で町奉行支配地でもありました。当時からあったのは六地蔵真性寺（現在もそのまま実在）です。江戸全体から見れば比較的新しい町でした。当時の巣鴨は４つの町に分かれており、板橋側から上組・上中組・下中組・下組となっていました。19世紀以降、場末として両国・深川と同じ江戸の行楽地でした。植木屋が多く、それもただの植木屋でなく、菊をいろいろと創作して見せる、今のテーマパークのようなところだったようです。現在のとげぬき地蔵（高岩寺）は明治時代に上野駅を作るため、上野の山から巣鴨の現在地に移されたものです。

内山長太郎の生涯

当時の植木屋として書物に載っている内山長太郎について紹介します。幼くして植木屋を志し、15歳から唐辛子の苗（賞翫用の苗）の行商をし、吉原の遊女に好評を博しました。また富山藩主・前田利保と知り合ったほか、多くの藩主とも知り合い、その名を高めました。天保飢饉で野菜が高騰した折り、川越在からかぼちゃを仕入れ、江戸市中に投売りし大儲けしました。その儲けで土地を買い植木屋を開業、江戸から見物客を集めたのです。巣鴨の地域性をうまく利用してジャンプアップさせたといえるでしょう。

巣鴨町軒別絵図

仁孝天皇の第８皇女和宮（悲劇のヒロイン）一行が文久元年（1861）江戸に入ることを知った幕府は、この一行が多勢で板橋宿では賄い切れないので急遽巣鴨の町方の絵図を作成、巣鴨に宿を取るよう通達を出しました。当時の江戸切絵図では武家のみが明記され、町方の商人等は明示されていませんでした。急遽３日間で作成した絵図（名前と職を書いたもの）は商店等を明記、家作の大きい所に○を付けていました。その軒別絵図を分析すると交通関係、食べ物屋、植木屋、野菜類の４分類になり、植木屋だけでなく、近隣に食べ物屋があり、植木を見た後一杯やろうとしたらしく行楽地だったことが分かります。現在の桃花源ビルは、植木屋保坂四郎左衛門の土地でしたが、飲み屋の遺物が大量に出てきました。植木屋のはずがなぜか？しばらく不明でしたが、軒別絵図と結びつけてみてすぐ判明しました。四郎左衛門が平右衛門に土地を貸して「飯屋」を営ませていたのです。

JR巣鴨駅前に「福島家」という老舗の和菓子屋さんがあります。この和菓子屋のご先祖福島弥三郎さんの名が軒別絵図にあることが分かりました。面白いことに、言い伝えによる江戸時代の福島家の位置は軒別絵図の位置とほぼ一致し、同絵図の史料的信頼性が高まったのです。今の地図と絵図を照らし合わせて見たら（５ポイントを照合）、ほぼ位置関係が一致していることが分かりました。

21世紀の巣鴨をどうイメージ？

巣鴨の軒別絵図と内山長太郎の行動とをまとめてみると、交通、流通、遊興の３つの要素で一致します。とりわけ巣鴨は交通の起点になっていて、川越と深い関係があったのではないかと分かりました。今後はこれまでの調査を基に様々な情報とつなげる必要があります。その１つとして、巣鴨遺跡の膨大な発掘データが保存されており、この確認作業がさらに必要です。一方、インターネットで情報を探ることも必要と考えます。都の国道17号線の拡張工事、区の巣鴨市街地活性化計画の着手等で多くの問題を抱えているので、シンポジウムを立ち上げました。

私は江戸時代から地域に根付いた生活文化をそのままに町づくりに活かしてはどうかと提言しています。楽しい遊び心があって「もてなしの町巣鴨」を引き継いだものがほしいのです。将来はコンピュータグラフィックを活用した軒別絵図を再現させたいと考えています。皆様が巣鴨に来られた折に、この絵図を持って歩かれて見物していただければと思っています。

【記録】　文：広報部会・岡本静雄
　　写真：　同・佐藤幸彦

第36回　江戸東京博物館友の会セミナー（2006/1/21）

シーボルトとモースの日本コレクション

── 19世紀における日欧米異文化交流（その2）──

講師　小林淳一さん
（江戸東京博物館 事業企画課長・学芸員）

セーラムという港町

アメリカと日本の文化交流の始まりは、東海岸のセーラムという港町からです。江戸時代、鎖国という言葉には閉ざされた国という意識を持ちがちですが、実は長崎出島を窓口としてヨーロッパとは結ばれていました。最初はヨーロッパを経由してアメリカへ日本の情報が流れていました。しかし、文化交流というのは日米の場合にしても、ペリーの来航とか日米和親条約締結とか、そういう歴史的事件が契機で始まったということではなく、もっと以前から物の動き・貿易によって行われていたのです。

セーラムはボストンから車で北へ30分くらいのところにある古い港町です。当時の日本までの海路をたどるとアフリカの黄金海岸から喜望峰を経由し、インドネシアを経て長崎へつながります。このセーラムにあるピーボディ・エセックス博物館は私も1年ほど滞在研究してきたところですが、ここには膨大な日本コレクションがあります。

1620年9月、イギリスを追われた清教徒たち102名はメイフラワー号で出航し、一時期オランダのライデンに逃れ、難航海の末11月にマサチューセッツ州のコッド沖へ到着します。ここで船の整備をし、植民地の候補地を探索してプリマスに上陸します。プリマスには今でもその記念碑があり、1620年と書かれた大きな石が置かれているのですが、真偽のほどは分かりません。彼らはここで植民地を開き農業をはじめて6年後、1626年にはセーラムに入植しています。この町はダービィ埠頭（ふとう）という桟橋があり、バックには広大な森林がありました。海でとれた海産物の加工品や森林からとれる木材をカリブへ輸出し、帰りの船で糖蜜を運んできました。

こうしてセーラムは16世紀から17世紀にかけて黄金時代を迎えます。当時の船長や船主たちは豪邸を建てました。これらの邸宅は住む人は変わりましたが、今も残っています。しかし、交易で貨物の量が増え、船が大型化しセーラムの港では浅すぎて接岸できなくなり、ボストンやニューヨークなどの大都市へ貿易の拠点が移ってしまいます。

「中立国傭船」の時代

1799年、セーラム東インド海運会社（ピーボディ・エセックス博物館の前身）がオープンします。それに先立ってセーラムから長崎にフランクリン号が到着するのです。当時、日本で貿易を許されていたのは西洋ではオランダだけでした。しかし、フランス革命でオランダは船が出せなくなりました。対日交易を独占したいオランダは中立国アメリカへ傭船（ようせん）依頼をします。中立国傭船の時代です。フランクリン号は長崎港の寸前で星条旗からオランダの国旗に変えて入航していました。この船がセーラムを発ったのが1798年で1799年に出島に到着しています。2度目がマーガレット号で1800年にバタビア（ジャカルタ）へ向かいます。最初は日本が目的ではなかったのですが、バタビアで東インド会社から依頼され長崎へ着いたのは1801年です。バタビアからは蘭学の機械や香辛料などを積んできました。帰りには銅や日本のいろいろな物産を積んでバタビアに戻り東インド会社へ荷物を渡すという方法でした。ただしマーガレット号の船長や船乗りたちは荷物の一部をアメリカへ持って帰りました。それまでヨーロッパ経由だった品物が、セーラムに直接入ってきたのです。

ピーボディ・エセックス博物館にはマーガレット号のダーヴィ船長やフランクリン号のデプロ船長たちが日本から持ち帰った品物が約3万点ほどあります。その中には日本製ではあっても、当時の日本では使われていなかった品物があります。いわば輸出用製品です。コート掛けや扉を開けると引き出しがついた小さな箪笥（たんす）、フォーク立てなどが、いかにも日本らしい細かな細工でできあがっています。

モースの日本コレクション

生物学者のモースが最初に日本へきたのは明治10年（1877年）です。翌年再び現東京大学初代動物学教授として来日しました。日本の先住民の研究に努め、大森貝塚の発掘は有名です。開化以前は集まらなかった日本の庶民の生活の資料がモースの目を通して集められました。彼の描いたスケッチも残っています。

モースコレクションは、生活用品がたくさんあります。ぞうきんやまな板、鰹節（かつお）、いなごの佃煮（つくだ）、ところてんつき、蚊取り線香（ぼうき）、シュロ箒（ぞう）、片方だけの草履（ぞうり）などなど、本物がそのまま残っています。この他に人間と同じ大きさの人形（生き人形）があり、その美しさには驚かされました。

モースは日本の品物から、日本という国、そこに生きる人々を理解しようとしていたのでしょう。

【文責】　広報部会・岡橋園子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会　特別内覧会
（2005/12/22）

大河ドラマ「功名が辻」特別展

「山内一豊とその妻」

平成18年のNHK大河ドラマ「功名が辻」と連動して、「山内一豊とその妻展」の一般公開日（平成17年12月23日）の前日、特別内覧会が江戸博1階ホールで開かれました。

始まりにあたってNHK関係者、高知県知事、山内家19代当主、ドラマで一豊を演じる上川隆也氏などが招かれ、アナウンサーの三宅民夫氏の司会であいさつがありました。竹内誠館長のユーモアを交えたお話で、場はすっかり和やかなムードにつつまれました。

山内一豊と言えば、妻の千代が鏡箱の中から取り出した黄金10両で名馬を買い、織田信長に認められた逸話が有名ですが、真偽のほどは分からないようです。ただ、夫婦で戦乱の世を巧みに生き抜き土佐一国の大名にまでなったことは事実です。それには一豊が人の意見をよく聞き入れ、人を見抜く力があったこと、千代が先を見抜き内助の功をはたしたことが出世につながったのです。

企画展では、山内家に伝えられた至宝294点が、第1部「山内一豊とその時代」、第2部「戦国の女性たち」、第3部「山内家に伝えられた美と歴史」と分けられ整然と飾られています。その中に国宝3点、重要文化財17点、指定文化財・有形文化財・県宝が約20点と非常に見応えのある特別展になりました。

第1部は古書の類や繊細な蒔絵を施したすずり箱が素晴らしい。その他ではなんといっても南蛮屏風でしょう。港での船の様子、町を歩く人々の衣装の色彩の美しさには、しばし足を止めて見入ってしまいます。秀吉好みの豪華絢爛な世界へ移ろうとする時代が感じられます。合戦の様子を描いた屏風は人物が非常に丁寧に描かれています。聚楽第に後陽成天皇が行幸された屏風は貴族の様子が伺えます。墨絵の屏風もなかなか面白い作品です。その他武具の数々も愛好家にとっては見落とせないでしょう。

第2部では戦国の女性たちが着た小袖の色使いが楽しい。また、女性たちの自筆の書状が数多くあり文字の美しさに見とれます。ここでも醍醐の花見の屏風や短冊が目を引きます。

第3部は山内家の美と歴史の世界です。武具や能衣装や能面には、歴史と芸術の奥深さが感じられます。国宝の高野切本、古今和歌集は大変価値のある作品です。

この他、何度も足を運ばなければ全部見終わるのは無理なほど、数多くの作品が並んでいました。

【取材】　文：広報部会・岡橋園子
　　写真：　同・佐藤幸彦

江戸博クリップ

友の会の電話に出ることもあります

ボランティア事務局　展示係　林 美香子

総勢260名になる江戸博のボランティアさんと館学芸員の橋渡し役として従事するようになって早2年。学芸員資格も、この江戸博がテーマとする歴史・文化に全く素養がない私ですが、おかげさまで徐々に日々の業務をこなせるようになりました。

一言に“橋渡し”役といっても数々の業務が存在し、慣れるまでは本当に大変だったのを覚えています。最初の数ヵ月は、名前も顔も所属も覚えていないボランティアさんからの問い合わせや、展示室を1回やそこら見学しただけで、お客様からの展示ガイド予約の電話を受けていたわけですが、はっきり言って満足な対応ができなかったように思います。でも、お客様やボランティアさんの温かい思いやり、館職員の熱心なフォローに何度と救われました。そのおかげで私も、一つ一つこなすごとに仕事の要領と、それにボランティアさんの名前、顔、特技、性格などが分かるようになり、このことが今の仕事をスムーズに運ぶ原動力となっているような気がします。実は、この江戸博ボランティア事務局は2つ目の職場ですが、今では本当にいい職場、ひとに出会えてよかったと思えるまでになりました。

ところで、私このボランティア事務局という担当職務をしつつ、時々“友の会”事務局の電話にも出ることがあります。友の会担当の藤井さんが出勤していない曜日（主に火曜日、木曜日、たまに土曜日）の電話口で少し女性にしては大きく太い？　声が聞こえたら私だと思ってください。微力ながらできる限りみなさんのお力になりたいと思っています。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2005/12/3）

大正浪漫夢通り～菓子屋横丁

＜小江戸川越　蔵造りの街探訪＞

蔵の街を歩くみなさん

心配だった天気もまずまず、総勢33名、2班に分かれての街歩きとなった。小江戸巡りも佐原、栃木についで第3回目。集合場所の西武線本川越駅の第一印象は「観光一色の都会」、歴史の町というより大観光都市だ。

■大正浪漫夢通り

繁華街を歩く、連雀町熊野神社はちょうど「酉の市」、やゝ進むと和洋を織り交ぜた大正時代風の建物と石畳がレトロ気分をかもしだす。「大正浪漫夢通り」とある。

■川越城へ

何回か丁字路にぶち当たり、道幅は狭くなり、蔵造りの家が目立って多くなる。寛永15年(1638)5代藩主松平信綱により造られた町の原型すなわち、七曲り、鍵の手、丁字路、袋小路へ入って来たと実感する。市役所のある辺りは城の西端、西大手門のあった所と聞いたが、ここからは東に向かって正面右側に本丸御殿跡、左側は現在市立博物館となっている。

■本丸御殿

川越城は長禄元年(1457)、扇谷上杉氏が家臣太田道真、道灌父子に命じて築城(当時は河越城)させたのが始まり、後に徳川の重要拠点となったといわれている。現在の本丸跡は、嘉永元年(1848)造営の玄関、広間の一部、家老詰所のみだが、唐破風の大玄関、三葉葵の鬼瓦は見ごたえ十分。廊下に掲げられた歴代藩主名を眺めると、3代酒井忠勝、8代柳沢吉保等々大老、老中がズラリ、川越の重要性をしのぶに十分であった。

■川越市立博物館

近代的な建物である。内には川越の地形、街並みの大型ジオラマ、おなじみ「江戸図屏風」職人と祭りに触れた民族コーナーと盛り沢山。何より開館以来15年のガイドさんの名調子に一同息をのむ思い。

■蔵造りの街へ

市役所の前を戻り、西へ直進。札の辻と云う交叉点に出た。かって高札場のあった城下町の中心地である。ここから南へ、比較的広い道路の両側に蔵造りの街が伸びている。明治26年(1893)の大火の後、耐火、類焼防止に十二分に配慮して造られたものといわれる。江戸情緒にひたる。時の鐘、蔵造り資料館、川越まつり会館と蔵の街には見どころが多い。

■菓子屋横丁

今回の街歩きは、菓子屋横丁の入口での解散とし、あとは各自の自由行動となった。狭く、混雑した駄菓子の並ぶ横丁、多分ここは初めてなのになぜか懐かしい。童心に帰って芋アイスを食べ歩く。心残りは喜多院、東照宮一帯を割愛したこと。3時間の行程ではどうにも組み込めず川越は丸一日コースと知りました。

【報告】　文：事業部会・玉木達二
　　写真：同・松原良

会議・会合日誌

2005/12～2006/1

◆役員会

12月8日(木) 18時から開催。会計から11月末の会員数が1,000名を突破したことが報告された。友の会創立5周年記念行事は竹内館長記念講演と懇親会が予定されているが、懇親会は総会後のパーティーと変りばえしないものにならないよう再検討することになった。出席10名。

1月12日(木) 18時から開催。5周年記念行事の竹内館長記念講演後の懇親会は検討の結果行なわないこととした。また、館長記念講演は新聞などを通じ一般参加者を募ることにした。出席11名。

◆事業部会

12月1日(木) 18時から開催。11月事業の報告、12～2月までの担当者決定、会員からの要望への回答案について協議した。出席13名。

1月6日(木) 18時から開催。12月事業の報告などのほか、会員による「研究発表会」について話し合った。出席16名。

◆広報部会

12月21日(水)15時から開催。『えど友』第29号の反省、同第30号の内容、来年度の編集アイディアなどを話し合った。出席9名。なお会議後両国駅近くの店で忘年会を行った。

1月18日(水) 16時から開催。『えど友』第30号の日程、内容、担当の確認などを行った。出席9名。

◆総務部会

12月22日(木)13時から開催。『えど友』第29号、『江戸東京博物館NEWS』などの発送作業を行ったあと、今後の部会運営などを話し合った。出席7名。

1月26日(木) 11時から開催。えど友サークルの扱いなどを話し合った。出席7名。

えど友プラス

～友の会会員の投稿欄～

甲州道中「ある記」
第３回 府中～駒木野宿

管林義隆

飛田給から白糸台に入ると府中だ。染屋不動、常久一里塚を越え、右小金井街道、左東京競馬場の交差点を過ぎると大きな鳥居が目に飛び込んできた。府中はいうまでもなく武蔵国の国府の所在地、武蔵では一宮から六の宮までを祭祀したが、六所明神は今この大国魂神社になっている。大きなケヤキの立ち並ぶ参道を歩き、二礼、二拍手、一礼でお参りした。５月５日の例祭は闇夜祭りとして知られ、夜中に祭儀が執行されるが、近隣はもとより江戸あたりからも泊りがけの参拝者で賑わったそうだ。

200 mほど歩くと交差点の向こう角に「高札場」が残っている。北へは「川越道」、南へは「小田原道」の名残だ。さらに西へ進むと、立派な門のお屋敷が存在した。このあたりの連合名主であった内藤家の冠木門で、古い家柄をしのばせていた。

再び国道20号と合流して進むと、「やぼてん」の語源になったといわれる「谷保天満宮」。木立が茂っていて甲州街道からは拝殿の屋根も見えず。お参りしないで先を急いだ。道路に面して古い常夜燈が立っていた。南養寺とあった。

青柳を通過するといよいよ五差路、直角に左へ曲がるのが現在の甲州街道(国道20号)で日野橋が架かっていて、斜め左にはきれいな新奥多摩街道ができている。「甲州道中」はさらにその右の奥多摩街道を進むことになっている。少し行ったコンビニの手前を左に曲がり(標識あり)、西に走っている新奥多摩街道を南に突き抜けるように歩き、左側の下水処理場を過ぎた先は多摩川の土手で行き止まり。何と昔の「渡しの跡」って訳だ。『分間延絵図』には「此所ニテ常水川巾二十間位、夏秋ノ間渡船、冬十月ヨリ翌春三月迄仮之橋ニテ通行」とあるが、文政７年(1824)からは通年渡船となった(『宿村大概帳』)。もちろん、今、渡しは無いので立日橋を渡ることにした。なんと橋の右上には多摩都市モノレールまで走っている。200年と違わないのにえらい違いだねー。

多摩川を渡ると「日野宿」だ。市民の森を右手に見ながら進むと国道20号にぶつかった。右折するとまもなく左手に、以前ゴルフの帰りに車で何度か寄ったことのある蕎麦屋「日野館」は何と「日野宿本陣」という歴史館に生まれ変わっていた。建物は都内に現存する唯一の本陣で貴重な文化遺産だ。幕末における佐藤家の息遣いが伝わってくる。駐車場のところは、近藤勇ゆかりの天然理念流の道場跡だ。

さらに進んで、JR日野駅の手前を左に折れ、宝泉寺の角を右に曲がり、駅のホームの下をくぐり、ゆるい坂を上り、左折して大坂という急な坂を上り切ったところで右手には日野自動車が見えてきた。背の高い木々で目隠しされた塀が長々と続いていたが10分ぐらいで抜け、さらに黙々と歩き通した。右手には昔の名残をとどめるように、広い敷地の家々が延々と続いていた。古い造りの屋敷や門もところどころに残っている。

浅川にかかる大和田橋までは随分時間が掛かった。この橋には昭和20年(1945)８月の空襲における焼夷弾の跡が残されていた。甲州道中はこの橋を越え、右へ折れてバイパスに入る。350 mぐらい歩いた中学校の西端で左斜めに進んだ。ぶつかったＴ字路を左折して進むとまた国道20号に出た。この辺りに八王子宿の木戸があったそうで、「横山宿」の始まりだ。赤い鳥居の市守神社にお参りし、「八日市宿」、「八幡宿」、「八木宿」と進んで来て、陣馬街道と分岐する追分の交差点に到着。八王子空襲で破壊された道標が最近修復され、建てられていた。新しい石を加え、四つの石をつなげてあった。ここで少し休憩した。

高々とそそり立つイチョウ並木(４キロに及ぶとのこと)を再び歩き始めた。千人町(八王子千人同心が集住していた町)を過ぎ、長房団地入口の信号で右折して50 m先を左折、250mほどで20号に合流。多摩御陵入口交差点を過ぎて200mで右手へ20号と分かれる。弓なりの曲線を描いた道が700～800 m続いていた。道沿いに用水が流れ、江戸期の面影を一番残していた。

町田街道入口交差点で20号に戻り、高尾町に入った。緩やかな上りが延々と続くが、古風な造りの高尾駅を左手奥に見ながら通り過ぎ、古くて、小さな和菓子屋さんで大福もちを買って、食べながら歩いた。元気が出て、脚が軽やかになったところで両界橋にたどり着いた。下には南浅川が流れ、上にはJR中央線の鉄橋があった。

鉄橋を潜り100 mほどで20号とさよならして、甲州道中はいよいよ登りの坂道となり、「駒木野宿」に入った。左に駒木野病院を見て通過し、約１キロ歩いた中宿にあたる所の右手に「小仏関跡」が現れた。戦国期には小仏峠の頂上にあったものを天正８年(1580)駒木野に移し、さらに寛文元年(1661)現在地に設置した由。建物はないが、手形石と手置き石が残されていた。

[本稿はひとまず今回で終わります]

▲歴史館に生まれ変わった本陣

皆さんのご意見・ご要望にお答えします

友の会あてに会員の皆さんからいろいろなご意見・ご要望が寄せられていますので、お答えいたします。まず、ご意見等を寄せられた方々には、執行部の不手際でご回答が大変遅くなりましたことをおわびいたします。今後は担当の部会を総務部会とし、迅速な対応を心がけますので、ご質問・ご要望・ご意見をふるってお聞かせください。

問　天候不順の場合、見学会を実行するかどうかの直前情報がほしい。

答　ごもっともなご要望です。本年４月から悪天候などによって見学会を中止する場合には、前日にその旨を参加者に電話連絡することにし、参加証（「案内はがき」）にその旨を明示します。なお、当日の朝の問合せについては、参加証（「案内はがき」）に記載する「友の会の携帯電話」あてにお尋ねください。

問　当日集合時間に遅れてしまった場合どうすればよいのか（連絡先その他）。

答　本年４月からは、見学会をご案内する世話人が「友の会の携帯電話」を携行することにいたします。したがって、定時出発が原則ですが、遅刻が予想される場合には同携帯電話にご連絡ください。携帯電話の番号は、参加証（「案内はがき」）に明記します。

問　会員番号があるのだから、申込みはがきに毎回「住所・電話番号」の記載は省略できないか。

答　同様のご意見がありましたので、現在は「ご氏名・会員番号」のみで、その他についての記載は省略しています。

問　友の会セミナーの講師用のマイクをコードレスのピン型マイクにならないか。

答　設備上はコードレスの「ピン型マイク」・「ハンドマイク」とも使用できることになっています。しかし、講師によっては「ピン型マイク」の装着を希望されない場合もあり、臨機応変に対応させていただきますのでご了承ください。

問　葛西聖司氏、山本博文氏、氏家幹人氏などを友の会セミナーの講師に希望する。

答　希望理由などをお知らせいただければ、事業部会で検討の際に総合的に判断させていただきます。

問　友の会と「えどはくカルチャー」の古文書講座の日程が重なって残念。何とか調整して欲しい。

答　友の会としても江戸博の行事と日程的に重ならないよう常々努力していますが、双方の行事のすり合わせは不可能なため、完全に重複を避けることが難しいことをご理解願います。

問　日曜日の催事を増やして欲しい。

答　平成17年度は、古文書講座は一講座、また、友の会セミナーは４回、それぞれ土曜日開催として計画しました。できるだけ特定の曜日にかたよらないように配慮したいと思いますが、土曜・日曜は会場となる江戸博の会議室の確保が大変難しいこともご理解ください。

問　会員証に年齢を入れて欲しい。

問　65歳以上の会員証の色を変えて欲しい。

答　いずれもご要望の主旨は、友の会会員であっても65歳未満と65歳以上とでは催事の入場料が異なるため、「友の会会員証」のほかに、65歳以上を証明する「健康保険証」や「運転免許証」などを同時に窓口に提示しなければならないわずらわしさを解消できないかということだと思います。確かに「友の会会員証」に65歳以上と印字するか、あるいは色やデザイン面での配慮が一つの案として考えられます。しかし、新規加入時や更新時には64歳であっても、次回の更新時までには65歳になられるわけですから、上記の方法も完全な対応策とはなりえません。

他の方法としては、「友の会会員証」に生年月日を印字することも考えられますが、個人情報の面では年齢以上に忌避される方もおられるでしょうし、友の会事務局の事務量の問題、江戸東京博物館の込み合う窓口で生年月日から年齢計算をすることは大変に難しい面があり、現行方法を採らざるを得ないことをご理解願います。

友の会からのお知らせ

“見学会”に「傷害保険」を利用

友の会では催事の一つに〝見学会〟があり、毎回多くの参加をいただいています。こうした参加者が見学中に不慮の事故に遭い、死亡・傷害・入院・通院をされるようになったとき、所定の給付金が参加者に支払われるように三井住友海上火災保険株式会社の「行事保険」をその都度利用していますのでお知らせします。保険の掛金（保険料）は参加費から充当しています。

この保険の利用に当たっては、〝見学会〟の都度上記の保険会社に参加者（含む同伴者）の氏名・住所・電話番号を届けなければなりませんので、参加申込みの「はがき」にはお手数ですが氏名などを必ず明記願います。なお、当日現地で参加を申し込まれた方にこの保険の適用はありません。詳しい内容をお知りになりたい方は、事務局あてに「パンフレット」をご請求ください。

えど友

サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

◆江戸三十六見附を巡る会は「江戸・東京を見る会」に改称

◇1月25日(水)に第8回を開催。三十六見附巡りの終了にともない今後の行動について打合せを行い、名称を「江戸・東京を見る会」(仮)と変え、江戸6阿弥陀巡り、5色不動または33観音巡りなど現場見学を中心に活動することになった。世話人は磯辺晃さん(暫定的に現世話人の小笠原淑夫さんがサポート)。参加者は11名。

◆落語・講談を楽しむ会

◇12月17日(土)に第14回会合を開催。今回は落語ビデオを鑑賞した。内容は①「宿屋の富」(5代目柳家小さんと音声のみで10代目金原亭馬生と5代目古今亭志ん生による親子リレー)②「お神酒徳利」(6代目三遊亭円生と音声のみで5代目柳家小さん)③「幾代餅」(音声のみで5代目古今亭志ん生)。参加者は9名。

◇1月28日(土)に第15回の会を開催。今回は東日本橋界隈を散策、薬研堀不動尊で一龍斎貞友の講談を鑑賞した。コースは浅草橋駅から浅草見附跡の石碑、郡代屋敷跡の説明板、柳原土手、初音の馬場跡、初音森神社、旧跡両国広小路の石碑(寄席場、講釈場、浄瑠璃場)、中島商店・大木唐からし店、四つ目屋、寄席立花家跡、薬研堀不動尊。参加者は7名。

◆藩史研究会

◇12月23日(金・祝)第6回の会を開催。今回は子安洋子さんが因幡鳥取藩・池田家について、藩の概要、歴代藩主、藩史など豊富な資料を使って充実した研究発表を行った。洪水、大火、凶作、疫病、騒動の繰り返しの中で、名家老の活躍を知った。また、第2回テーマの豊後臼杵藩稲葉家について土屋献一郎さんから補足説明があった。参加者は14名。

◇1月27日(水)第7回の会を開催した。今回は後藤幸子さんが「加賀金沢前田家」の研究発表を行った。「加賀国(石川県)の諸藩」「加賀国金沢藩」「将軍の御成」「史料から見た御成と池遺構出土資料」「前田家代々の人々」「利家とまつ紀行」と豊富な資料が配布され、内容の濃い説明が行われた。12代斉泰に嫁いだ11代将軍家斉の21女溶姫が赤門を出て江戸城に向かう絵などを初めて見てとても興味深いものがあった。参加者は14名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

◇12月15日(木)に第4回の会を行った。今回は、元禄3年(1690)から元禄8年(1695)まで。ねずみが多くなり、耕作物を食い荒らし、餓死者が多く出たなどが書かれている。参加者は9名。終了後忘年会。

◇1月12日(木)に第5回の会を行った。今回は元禄8年(1695)から元禄11年(1698)までで、「流人の中には生類憐みの令が厳しかった時、つばめ1羽を吹き矢で殺すのに居合わせただけで遠島になった」例もあったそうだ。参加者は9名。

※なお、この続きともいうべき「まんが」が月刊「浅草」第422号(平成18年1月25日発行)の26ページにあります。原えつおさんによる「ポッポ君の浅草さんぽ」の253.「ねずみ小僧現わる!」です。ご興味のある方はご覧ください。

●新しいサークルの立ち上げを!

現在4つのサークルが独自の活動を展開しています。みなさんもサークルを立ち上げて、同じ趣味や関心を持つ人々との交流を深めてみませんか。サークルをスタートさせるための資料(ガイドライン)の請求、お問い合わせは事務局へ。

申込先　〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

ちょっと寄ってみませんか？

江戸博界隈⑧

[隅田川橋めぐり(2)]と[沖縄料理・ちゅらさん家]

隅田川橋めぐり(2)

墨提の桜への思いがあって、今回の橋めぐりは歩くことにしました。両国橋から桜橋まで1時間半ほどの水辺の散策です。

まずは両国橋を渡り、隅田川と神田川の合流点にかかる柳橋へ向かいました。柳橋といえば、江戸時代から船宿、料亭の並ぶ粋な街でした。橋の両端に小さな木造の船宿兼佃煮を売る小松屋があり、今も江戸の風情を伝えています。柳橋を渡ってすぐ右側に亀清楼があります。柳橋で唯一生き残った江戸の名だたる料亭ですが、建物は茶色のビルに替わり、周辺もすっかり現代の街。それでもビルの白い壁に小唄・新内稽古所の看板がかかっていたりました。総武線のガード下の階段から川辺へ下ります。

西岸は柳橋から蔵前橋の手前まで、護岸壁が武家屋敷に見られるなまこ壁風にしつらえられ、壁には大名の家紋もあって、和風の庭園造りになっています。しかし残念ながらその先がなく、蔵前橋の手前で土手を上がり街路に出なければなりません。榊神社を目当てにそこで右に曲がり、首尾の松の前を通って蔵前橋を渡ります。蔵前橋は昭和2年(1927)の架橋。西岸に幕府の米蔵が並んでいたことから付いた名です。ここからはずっと東岸を歩きます。

東岸の遊歩道には点々と青いシートの「家」が並び、いやでも目に入ります。「寒かろうな」と思わず口をついて出ることば。豊かな国の貧しい風景。

やがて厩橋(うまやばし)へ出ます。橋の名は米蔵に付属する御厩が西岸にあったため。明治7年(1874)の架橋で、今の橋は昭和4年(1929)の建造です。

次が駒形橋。橋下には屋形船が係留され、その乗り場があるためか、水辺の遊歩道は金網でさえぎられて行き止まり。手前で再び土手に上がります。駒形橋は昭和2年の架橋。名は橋の西詰めにある駒形堂に由来します。

ここから吾妻橋(あづまばし)までは高速道路高架下の緑地公園を行きます。吾妻橋は安永3年(1774)の架橋。有料で大川橋と名づけられたが、江戸の東にあったので人々は東橋(あずまばし)と呼び、後に吾妻橋となりました。今の橋は昭和6年(1931)の建造。そばにアサヒビールの本社ビルがあり、直営のレストランで生ビールを一杯というのも捨てがたい。

次の言問橋(ことといばし)までは水戸藩下屋敷の庭を生かした隅田公園を歩くのも悪くない。橋は昭和3年(1928)の架橋。その名を在原業平の「名にしおはばいざこと問はむ都鳥…」に負うのは周知の通り。橋のたもとに「言問団子」と「長命寺の桜もち」の店があります。

言問橋から桜橋までは両岸とも桜並木が続き、川面と向島の古い町並みが眺められる気持ちのいい散策路です。桜は8代将軍吉宗が享保2年(1717)に100本の木を植えさせ、本格的に並木造りが始まりました。その前から4代将軍家綱が植え始めてはいるのですが。桜橋は昭和60年(1985)に架けられ、上から見るとX字型の瀟洒(しょうしゃ)な橋。珍しく歩行者専用です。

私たちの取材は1月、雨雲がたれこめる風のつめたい日でした。そんな冬空の下でさえ、たゆとう水の流れが、そこはかとなく心をみたしてくれたことが意外でした。

沖縄料理・ちゅらさん家

一昨年12月の開店。従業員の7割は沖縄出身者です。食材もゴーヤや海ぶどう（海草の1種）など沖縄産のものを使用しています。島豆腐は沖縄のにがりと塩を使ったもので、週に1、2度は沖縄の魚も入るそうです。料理は調理法の歴史になじんだ食材がふさわしいとの思いがあるからです。

沖縄料理にはどこかなじめない感じをもっている人にも、この店の味はまろやかでさっぱりしているので、抵抗がないでしょう。

この店は、チャンプルー（豆腐を入れたいため物760円）、ラフティ（豚の角煮。油抜きがしてありくどくない。890円）、ティビチ（豚足の煮込み760円）などが「売り」です。好奇心の強い珍味好きには、豆腐よう（発酵豆腐でチーズに似た味490円）や、うちなあ塩から3種の盛り（島豆腐の上に塩からにした小魚のあいご、かつお、いかすみを載せて食す。760円）がおすすめ。沖縄そば（小490円、大650円）はうどんとラーメンの中間的なもので、少々硬めです。汁はかつお節と豚骨のだしでさっぱりしています。

この店は沖縄全48蔵の泡盛をそろえており、種類は300種以上。泡盛の古酒（3年もの）が花粉症に効くとの研究もなされているとか。オリオンビールが生で飲めるのはありがたい（中ジョッキ590円）。

江戸博から徒歩約6分　墨田区両国3-26-6
伸和ビル3F　電話5669-1290
営業時間　平日11時～翌4時半、日曜・祝日11時～翌0時

【取材】　文：広報部会・大野晴美
地図・写真：同・松原良

催事案内

友の会セミナー

第39回「古文書が語る白木屋の商いと暮らし」
—店定法から読む日本橋店の奉公人—
講師　油井宏子さん

◆『永録』は、江戸の大呉服商である白木屋日本橋店の規則書です。52か条の「一つ書き」には、奉公人の心構えや商売の方法、生活上の決まり、などが書かれています。この文書からは、江戸店の奉公人の姿がありありと浮かびあがってきます。そして、それは現代の企業の従業員規則と共通するところがありそうです。「お客さまへの進物や饗応(きょうよう)は、過不足があると後任者がやりにくいので、ちょうどよいほどあいを見計らうように」など、興味深い条項を解読しながら、江戸店の奉公人の姿をさぐっていただきます。

○講師略歴：あぶらい・ひろこ
NHK学園古文書講師、市川市博物館協議会委員。著書に『古文書はこんなに面白い』『古文書はこんなに魅力的』(柏書房)、監修に『古文書検定入門編』(柏書房)。

・開催日：4月22日(土) 14：00～15：30
・申込締切：4月11日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】 山口千恵子(事業部会)

特別内覧会

企画展「ナポレオンとヴェルサイユ」展

◆ナポレオンの皇帝戴冠200周年を記念して、ナポレオン関係のコレクションでは世界有数の規模を誇るヴェルサイユ宮殿美術館の全面的な企画協力により、ナポレオンの波乱の生涯を軸として、その時代に花開いた新しい美術様式や文化、社会の様子を浮き彫りにしようとする展覧会です。絵画、彫刻、家具、調度品、食器、ジュエリーなどのほか、皇帝が執務し生活した宮殿室内も再現され見ることができます。

・開催日：4月10日(月)午後(開始時間未定)
　＊開始時間は申込んだ方には受講票でお知らせします。
・申込締切：3月30日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円、同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】 伴野睦雄(事業部会)

見学会

「江戸四宿を歩く　板橋宿」

◆江戸四宿巡りも終盤。板橋宿を歩きます。今回は江戸に向かって上宿、仲宿、平尾宿と細長く延びた街道周辺と東側に広がる広大な加賀百万石の下屋敷跡を巡ります。宿場には見どころも多く、和宮、高野長英、浮田秀家、近藤勇と登場人物も多彩です。加賀屋敷周辺では、現在桜の名所として名高い石神井川の景観も見られます。

・開催日：3月25日(土) 12：45集合
・集合場所：都営地下鉄三田線・板橋本町駅
・申込締切：3月14日(火)必着
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
・参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】 玉木達二(事業部会)

「銀座(東銀座側)と築地方面の探訪」

◆昨年実施した旧銀座れんが街の探訪に続いて、江戸三座の一つ森田座跡、現歌舞伎座、東京商工会議所発祥の地など銀座東側の史跡と、築地居留地跡、浅野内匠頭上屋敷跡、芥川龍之介生誕地、シーボルト胸像など築地の多くの史跡を探訪します。なお、探訪終了後前回も好評だった懇親会をオプションとして計画しています。

・開催日：5月13日(土) 12：45集合
・集合場所：東京メトロ日比谷線・築地駅(聖路加病院口)
・申込締切：4月25日(火)必着
・定員：80名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
・参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

※オプション会費は3,500円以内を予定、参加希望の方ははがきにその旨書いてください。予約制のため4月28日までにキャンセルの連絡のないときは会費を徴収させていただく場合があります。

【企画担当責任者】 藤村武雄(事業部会)

古文書講座

第3期の残日程など

＊入門編　　3月1日(水)
＊初級編(1)　3月15日(水)
＊初級編(2)　3月18日(土)

・開催時間：すべて14：00～16：00
・会場：江戸博1階会議室または学習室1・2のどちらか(当日お確かめください)

【企画担当責任者】 谷岡文彦(事業部会)

見学と鑑賞の会

「愛宕山(梅見)とその周辺散策＆講談鑑賞」

◆えど友サークル「落語・講談を楽しむ会」主催による全会員を対象とした見学と講談鑑賞の会。愛宕神社で「曲垣平九郎手折りの梅枝」を見ながら、講談師の神田織音さんのガイドで「寛永三馬術」のあらすじを説明していただき、浅野内匠頭終焉(しゅうえん)の地、烏森神社を経て新橋駅へ、JRで両国へ行き、昼食後お江戸両国亭で講談「寛永三馬術」の連続読み(4席)を鑑賞。参加費にはガイド料、寄席入場料、両国への交通費、昼食代が含まれます。

・開催日：3月15日(水) 9時40分集合
・集合場所：東京メトロ日比谷線神谷町駅1番出口改札前
・申込締切：3月7日(火)必着
・定員：30名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員、同伴者とも3,000円(当日払い)
※講談鑑賞を除く昼食までの参加も歓迎(参加費2,000円)

【企画担当責任者】鈴木秀明
(えど友サークル・落語講談を楽しむ会)

お申込方法

◆普通はがきに①催事名･開催日②会員番号③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号もお書きください(8ページの「友の会からのお知らせ」参照)。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

活動に参加しよう　各部会員を募集！

事業部会＝友の会セミナーや見学会、古文書講座など、事業の企画から運営までを担当。広報部会＝会報『えど友』の編集・制作、ホームページ『えど友 Web版』の制作・運営などを担当。総務部会＝友の会の運営全般、総会の運営、会報の発送、催事の受付などを担当。
普通はがきに希望部会、会員番号、氏名を明記して「友の会事務局」へご応募ください。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●企画展『江戸の学び－教育爆発の時代－』展

会　期　2006年2月18日(土)～3月26日(日)
休館日：毎週月曜日
図　録　定価1,890円、会員割引未定
会　員：一般500円、65歳以上250円、大･専門生400円
同伴者：一般800円、65歳以上400円、大･専門生640円

次回予告

●企画展『ナポレオンとヴェルサイユ』展

会　期　2006年4月8日(土)～6月18日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし5月1日、5月8日、5月15日の各月曜日は開館
図　録　定価2,300円、会員割引未定
会　員：一般650円、65歳以上320円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円

第2企画展ご案内

残り会期わずかです お見逃しなく！

・「東京エコ・シティー新たなる水の都市－」展

開催期間　2006年1月27日(金)～3月5日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

次回予告

・「昭和モダニズムとバウハウス ～建築家土浦亀城を中心に～」

開催期間　2006年3月14日(火)～5月7日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

江戸東京博物館友の会　会報＜えど友＞第30号
平成18年3月1日発行
奇数月刊。次号は平成18年5月1日発行予定

編集・制作：友の会広報部会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910
発行人兼編集長：松原　良(副会長)　　副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、大野晴美、斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄